



# 対人援助学における人称性の問題

——武藤（2017）へのコメント——

菅 村 玄 二

（関西大学）

The First, Second, and Third Person Perspectives in the Context  
of the Science for Human Services: A Comment on Muto (2017)

SUGAMURA Genji

(Kansai University)

**Key Words** : helping relationships, clinical behavior analysis, humanistic psychology, methodology, reflexivity  
キーワード：援助関係，臨床行動分析，人間性心理学，方法論，再帰性

## はじめに

本誌の「対人援助学」(science for human services)とは、既存の学問体系ではない。「広く『人を助ける』という実践的行為について、その作業を当事者の決定を軸に過不足なく行うための方法を考える新しい領域」(対人援助学会, 2012)と定義されている。対人援助学が、この「人を助ける」側と「当事者」側という人間関係を基礎とする以上、人称性の議論は非常に示唆的であり、一考に値するものである。

## 人称性の文法的意味と対人援助場面への適用

これまで、科学的方法はしばしば人称性の観点から議論されてきた。科学哲学では主客問題は避けては通れない問題であり、三人称は客観性の別称でもあることから、それに対する主観的アプローチが一人称とされることは当然の帰結といってよい。しかし、武藤（2017）のレビューにあるように、科学論においては、一人称、二人称、三人称の用語の使い方には、共通性もあるものの、一貫性が見られない点も含む。とくに、二人称については看過されてきたところもあり、武藤（2017）が取り上げなかった議論も含めて、その位置づけが論者によって大きく

異なっている (Gunnlaugson, 2009; 野家, 2004; Varela & Shear, 1999; Wilber, 2015)。

人称性自体は、文法範疇であり、明確な区分である。おそらく、そこに援助という特殊な対人関係と、それに対する科学的研究という2点が付加されることによって、多義性が生まれ、議論が複雑化していると推察される。そこで、まず、本来の、すなわち文法的な人称性の区別に立ち戻り、それを対人援助の文脈に置き換え、最後に、対人援助に対する科学的アプローチを考える、という順序で議論を進めることにする。

## 文法学における人称性

日本語は主語の省略を本質とする文化であるため、人称性の問題について意識する機会はありません (菅村, 2016)。だが、欧語や中国語は、基本的に主語と述語がなければ、意味が完結しない文法体系になっており、人称性は、文章上の主語として必須であり、異なる人称性は明確に区分される。

**第一人称** 話し手としての主体を指す。「私」(I)や「私たち」(we)である。文例としては、「私は馬鹿だ」の「私」である。小説などのナレーションでいえば、主人公が自らの体験について、自らを主語にして語るケースを指す。「私はそんな事件が起こ

ろうとは夢にも思いませんでした」などである。

**第二人称** 聞き手としての対象を指す。「あなた（たち）」(you) である。「あなたは天才だ」と言うときの「あなた」である。ナレーションとしては、一人称と三人称が一般的で、二人称が使われることは少ないが、主人公などに対して、「あなた」と称する場合はこれにあたる。たとえば、「あなたはそのときはまだ元気でした」などである。

**第三人称** 話し手でも聞き手でもない対象を指す。「彼」(he), 「彼女」(she), 「彼ら」(they) などである。「彼女は破廉恥だ」という例文も三人称的文章である。「彼は桃から生まれた」と言えば、それは桃太郎の視点でもなければ、おじいさんやおばあさんの視点でもなく、基本的にそこにいない第三者（他者）ということになる。

### 対人援助における人称性

対人援助の含意は幅広い。本学会では「人を助ける」と換言されているが、これを疑問形にして、「Can I help you?」と言えば、接客場面が連想されるであろう。それも一つの対人援助である。ただ、本誌の過去の論文をみると、臨床や福祉に関するテーマがほとんどであるため、ここでは医学における診断史を例にとりて説明する。ここで注意すべきは、「I help you」という人間関係においては、「わたし」が援助者で、「あなた」が被援助者となるが、本学会が援助実践では「当事者の決定を軸」とすると主張するとき、当事者視点では被援助者が「わたし」で、援助者が「あなた」になるという点である。つまり、「わたし」という一人称は、話し手の主体を援助者とするか被援助者とするかによって、どちらの視点にもなる。

Foucault (1963/2003) に基づいて、診断の歴史を紐解くと、およそ17世紀までは、病像は患者の主観的な体験から記述されていた。言い換えると、患者を診断する際には、患者の主訴や肉体的外観、態度を手がかりにした、医師の観察による描写はほとんどなかった。これは、患者という当事者の視点から記述されるという意味で、診断学は患者側の一人称的アプローチから始まったと言ってよい。そして、そこに医者視点での二人称による記述はほぼな

かったということになる。

「種類を確かめずに、疾病を治療すべきでない」という今日では常識的な考えが前面に出てくるのは、18世紀になってからである。18世紀の後半から、疾病分類学(nosology)の研究が本格的に始まる。こうした動向のなかで、患者の病像の記述が、一人称から二人称へと視点が転換されることになる。つまり、一人称の記述(例、私は熱っぽい)から二人称の記述(例、あなたは顔が火照っている)へと比重が変わっていく。

19世紀から20世紀にかけて、水銀体温計の開発、顕微鏡の進歩、X線の発明などによって、生体機能の変化が病気の指標とされるようになる。こうした技術的進歩それ自体が、人称性の変化をすぐさまもたらすわけではない。たとえば、医者が患者の体温を測り、「あなたの体温は37度8分だ」と言えば、二人称的記述のままである。レントゲン技師が「彼は骨折している」と医者と話せば、形式上は三人称的記述にはなるが、医師から見れば「あなたは骨折している」という二人称的記述になる。

この時期以降に、三人称的記述へと変遷を遂げていくのは、「疾病分類」という医学の目的があったからである。すなわち、疾病を分類するなかで、「私」(医者)と「あなた」(患者)という固有の関係を超えて、診断体系を作り上げるうえで、たとえば、「彼ら(〇〇病の患者)は、体温38℃以上あるいは36℃以下、心拍数90/分以上、呼吸数20/分以上という条件のうち2つ以上を満たす」といった「**三人称複数**」を用いた、一般性の高い記述が求められるようになり、人称性の変化が生じたというわけである。

### 武藤の「二人称の科学」の検討

Gendlin & Johnson (2014) は、自己再帰性(self-reflexivity)と過程(process)を中心に据える一人称の科学を提唱した。武藤(2017)は、彼らの議論を再整理し、それを拡張し、自己言及(再帰)-他者言及(記述)、内容-過程という二次元に、自己-他者を加えた三次元モデルに構成しなおし、他者の過程について再帰的に研究する領域を「二人称の科学」として位置づけた。

そして、それを体現する学問として、臨床行動分析を取り上げ、それが対人援助学の方法論として相応しいと論じた。その根拠とされたのが、臨床行動分析のもつ、(a) 三項随伴性の恣意的な分析ユニットの採用、(b) 個体内・間の系統的な追試デザインによる質的（主観的な）側面の補完、(c) 体験的アプローチの実践、という側面である。

これら3つの側面が、対人援助とその科学において、有用な方法論となりうることは理解に難くない。しかし、それを二人称と呼ぶべき、あるいは呼びうる必然性はあるであろうか。あるとすれば、どのような意味においてであろうか。以下に、3つの根拠のそれぞれについて検討していく。

### 三項随伴性の採用

行動分析学における三項随伴性が恣意的な選択であることはよく知られている。ここでいう恣意性とは、研究者個人による分析ユニットの判断を表す。武藤は学校臨床場面を例に、援助者が職業倫理を含めた反省的過程を伴うことを再帰的行為と呼び、これを「二人称の科学」と称することの根拠の一つにしている。

援助者と被援助者との二者関係において、援助者が被援助者を記述する限り、文法学上は、それが二人称的記述ということになる。たしかに、三項随伴性の恣意性や倫理性に自覚的になることは、援助者にとっての再帰性を意味する。しかし、それは実践上きわめて重要な態度ではあるものの、二人称的關係であることとこの再帰性は、本来は、別個の次元ではないだろうか。

Gendlin & Johnson (2014) のいう自己再帰的な過程とは、被援助者自身のプロセスであるが、三項随伴性の恣意性は援助者の一人称の問題であって、そこから二人称性は直接的に導出されない。援助者の反省的過程は二人称アプローチにおける必須の要件ではなく、むしろそれは援助者を主体とした一人称的アプローチであり、三項随伴性を採用しようとしまいと、それが恣意的であろうとなかろうと、援助者が被援助者を「あなた」として関わる限り、それは二人称的アプローチということになるのではないか。三項随伴性とその恣意性は、むしろ一事例の

実験デザインとセットになって始めて、「二人称の科学」として有用な方法論となるように思われる。

### 一事例実験計画による質的側面の補完

一事例の実験デザインは、援助者にとっては、被援助者一人ひとりに合わせた記述と検証を可能にする枠組みである。このデザインにおいて、援助者が「実験者」を兼ねる場合は、科学的実践を行う援助者が「わたし」で、被援助者が「あなた」となるため、これを二人称的アプローチと称することは適切であろう。ただ、「二人称の科学」と呼びうるか否かは、科学の定義によろう。

武藤は Gendlin らの議論に基づき、科学の要件として「再現性」をあげるが、再現性には方法の再現と結果の再現がある。前者のみを再現性とする場合、被援助者の特性や状態、経過、ならびに治療的介入の手続きの詳細な記述があれば、方法の再現は一定程度可能である。これは「追試できるレベルに方法を記述せよ」という科学論文の基本ルールにすぎない。この意味での再現性であれば、臨床行動分析に限らず、他の学派でも同様に当てはまる。たとえエビデンスの質が低いとされる一事例の症例研究であっても、詳細な方法の記述をもとに自身の臨床実践に活かすうるとすれば、それは再現性を担保する記述がされていると言える。

他方、結果の再現性については、人間を対象とする研究は、医学も含めて、一般に再現性が低いことが知られている。実際、一流の心理学ジャーナルの100の研究を追試したところ、39%しか再現できず (Open Science Collaboration, 2015)、一流誌以外を含めると、20%を切るという推計 (Baker, 2015) もある。したがって、科学の定義として方法の再現性のみを要件とすると、それは学派に限らず、単なる論文の記述の仕方の問題となり、一方で、結果の再現性を科学の定義に含めると、人間を対象とする科学（ここでは対人援助学）は科学性が十分に担保できないことになる。

臨床行動分析が二人称の科学であるとするれば、その科学性とは、むしろ三項随伴性の同定（恣意的選択）と環境事象の制御に由来する「操作可能性」と、一事例実験デザインに基づく「予測可能性」にある

と考えたほうがよいように思われる。その意味では、二人称の科学と呼びうるのは、もちろん、臨床行動分析に限らない。認知臨床心理学の父といわれる Kelly (1955) の「役割固定セラピー」や、Mahoney (1974) の「パーソナル・サイエンティスト・アプローチ」などもここに含まれるであろう。臨床行動分析は二人称の科学といえるが、武藤がそれをあくまで「具体例」と述べているように、二人称の科学がすなわち臨床行動分析でない点には注意が必要である。

たとえば、Kelly (1955) の「人間-科学者モデル」(man-the-scientist model) は、個人がいかにか世界とのかかわりを予測して生きるかという理論体系である。臨床実践においても、被援助者の「個人的実験」が重要な役割を果たす。個人実験によって見出されたパターンから将来を予測し、仮説を修正し、また新たに実験するという臨床実践のあり方は、科学実践のプロセスと同一視される (Fransella, 1995)。このモデルの示唆は、あらゆる個人が顕在的にであれ、潜在的にであれ、仮説検証のプロセスとして人生を生きているということであり (菅村, 2007)、そのことに自覚的に実践する限りにおいて、科学の定義如何によっては、あらゆる援助実践は一人称の科学であると同時に、二人称の科学とも言えるかもしれない。

武藤は、質的側面を補完する実験デザインに関して、質的側面を主観的側面と言い換え、臨床行動分析が二人称の科学たりうる根拠の一つとしている。しかし、質的・量的かは、記述の形式もしくは分析の手法の違いであって、記述の主体と対象を指す二人称性と直結するものではない。むしろ、ここで「質的」と「主観的」を等置することによって、二人称的アプローチと結びつけようとするのであれば、次項の体験的アプローチの一側面として定式化したほうが理に適うように思われる。

### 体験的アプローチ

臨床行動分析の代表的アプローチとして、アクセプタンス&コミットメント・セラピー (Acceptance and Commitment Therapy: ACT) が挙げられている。そして、被援助者の固有の体験に沿ったメタファー、パラドクス、エクササイズを使用すること

で、オーダーメイド的な介入を行うことが「二人称的なかわり」として位置づけられている。

たしかに、一般に認知行動療法は、構造化、マニュアル化の傾向が強い。それは、「いつでもどこでもどのセラピストでも同じ治療が受けられる」という普遍性を目標とする理論的方向性をもつためである。この普遍性こそ、被援助者を「彼(ら)」として扱う三人称(複数)的アプローチが目指す科学性である。しかし、認知行動療法以外の学派、たとえば、人間性心理学や精神分析では、あるいは家族療法においても、こうしたマニュアル化の傾向はおおよそ見受けられず、むしろ被援助者に徹底的にオーダーメイドされた臨床実践がされるのが実際であろう。また認知行動療法でも、マニュアル化に否定的な立場もみられる (Mahoney, 1974)。被援助者である「あなた」に合わせたオーダーメイド的なセラピーは、二人称的ではあるものの、そのアプローチが体験的かどうかということとは、本質的に無関係ではあるまいか。

体験的アプローチが二人称的であるためには、それが被援助者一人ひとりの主観的世界を「あなた」の体験として記述するものでなければならない。その体験的世界を被援助者が語れば「一人称」の次元であるが、援助者が被援助者を「あなた」として記述すれば、それが二人称の次元ということになる。ただし、後述するように、被援助者の再帰的過程は予測不可能であり、それ自体が進展するプロセスであるため、そうした援助者の体験過程 (experiencing) を援助者が記述することが、実際的にどこまで、またいかにして可能であるのかは、別途、検討が必要である。

### 三次元モデルの再考

武藤 (2017) は、第一に、Gendlin & Johnson (2014) の議論を、他者言及 (記述) - 自己言及 (再帰) と内容 (静的) - 過程 (動的) からなる二次元に整理しなおした。第二に、そこに援助対象である他者-自己という軸を追加し、三次元モデルへと拡張した。そして、他者の過程について再帰的に研究する領域を「二人称の科学が行われる援助行為空間」と位置づけた。

Gendlin & Johnson (2014) の言葉を借りれば、「再帰的過程」(reflexive process) とは、過去のプロセス(過程)からは予測されず、演繹されず、構成されない、一繋がり全体性をなすものである。なぜ予測不可能かという、この過程では、まさにその再帰的過程によって、次なる過程が決定されるからである。再帰性と過程とは不可分な全体であり、これを切り離すことはできず、つねにセットにされる必要がある。この見解を受けるならば、たとえ便宜的にであったとしても、再帰性が内在するプロセスを「再帰」と「過程」に分割することの意義は見出しにくい。

Gendlin (1962/1997) は、過程と内容の違いについて、ランニングを例に説明している。ニュートン的な〈内容モデル〉では、「たまたまランニングしている少年」(*a boy who happens to be running*) というカテゴリで記述される。この記述様式は、継続的な変化に適用できない。一方、〈過程モデル〉では、「たまたま少年がしているランニング」(*a running, which happens to be a boy*) というカテゴリで現象を切り取る。ランニングは一つのプロセスであるため、彼がどこにいるか問うたり、ある場所にいたと思ったら別の場所に移動したなど述べたりする必要がない。代わりに、どれくらい速いのか、どれほど頑張っているのか、歩いたり座ったりしていることとは何が違うのかといった、継続的な変化の特徴に関する問いが生み出される。

すなわち、Gendlin のモデルでは、再帰的過程 vs. 不再帰的内容の二項対立のみが想定されており、再帰と内容や、不再帰と過程という組み合わせは、理論上、あり得ないため、2×2の表に展開する意味は実のところない。二次元化に意味があるとすれば、それは空欄となっている「再帰的内容」と「不再帰的過程」が何らかの意味をもつ場合であろう。それがなければ、議論がかえって複雑化するのみである。

それにもまして重要な点は、Gendlin の議論を踏まえるならば、再帰の対義は不再帰であり、非プロセスであって、「記述」にはなり得ないことである。再帰性(reflexivity)は、形式論理的に、自己言及性(self-reference)と同義であるが、Gendlin にとって、それはプロセスがそのプロセス自体に再参入す

ることであって、「他者」や「記述」という概念と対比されているわけではない。

武藤は、この二次元モデルに自己-他者という軸を加えて三次元モデルへと拡張したが、再帰性と過程は不可分であるため、Gendlin のモデルは再帰的過程-不再帰的内容という一次元で表したほうが理に適うと考えられる。ここに、記述の関係性として、自己-他者を加えて、二次元モデルで表現したほうがシンプルになる(Figure 1)。被援助者としての「わたし」が被援助者としての「わたし」を記述すれば、それは自己の再帰的過程を表しており、一人称的アプローチとなる(第1象限)。援助者としての「わたし」が被援助者としての「あなた」を記述すれば、それは他者の再帰的過程記述であり、二人称的アプローチとなる(第2象限)。そして、他者の不再帰的内容の記述の典型が三人称的アプローチということになる(第3象限)。

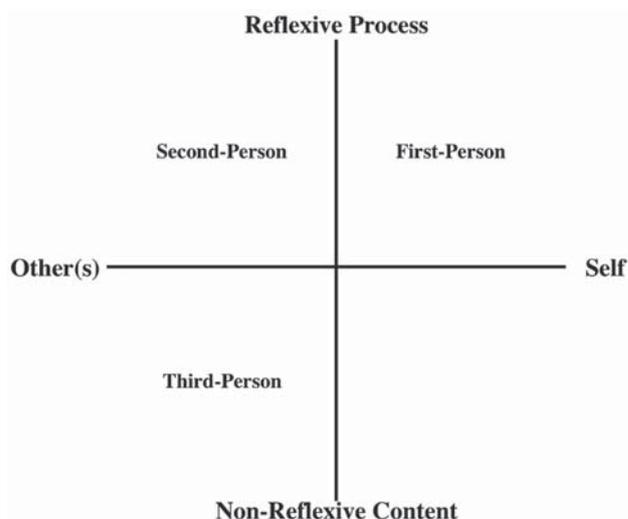


Figure 1. Two-dimensional remodeling of Muto's (2017) human service model.

ただし、この第2象限(あるいは、元々の3次元モデルの特定空間)に、武藤のいう「二人称の科学が行われる援助行為空間」と位置づけられるか否かは、さらに検討を要する問題である。臨床行動分析を例にとると、たしかに対人援助においては、援助者が被援助者を取り囲む環境事象の制御を行いながら、被援助者の現象学的場の世界を「あなた」の世界として記述することができれば、「二人称の科学としての援助」が可能となる。しかし、これが対人

援助学という科学性を帯びると、つまり、その援助関係自体が記述の対象となると、援助者が被援助者を「あなた」として記述できなくなる。その典型例はケース研究であり、被援助者が「あなた」と記載されることはなく、「彼／彼女」という三人称で記述されることになる。その時点で、対人援助は二人称でありながら、対人援助学は三人称へとシフトする。

武藤のいう「二人称の科学が行われる援助行為空間」の「科学」は、こうした人称の二重性を孕んでいる。そして、このような人称の多重性は、論文を書いている「わたし」を「筆者」と三人称的に表現することで、ますます隠蔽されることになる。かつての科学は、書き手の人称の三人称化と受動形の表現を推奨することによって、表面的な客観性を担保しようとしたが、昨今の英語圏では、一人称化と能動形が望ましいとされるようになってきた。これは書き手であり研究者である「わたし」の再帰性につながる動向であるが、科学的論文においては、被援助者である「あなた」はどこまで行っても「彼／彼女」であって、したがって、二人称の科学は、援助実践の場にもとどまることになる。

### おわりに

科学的方法論の文脈では、二人称は看過されることが多かったが、対人援助の代表的学問である医学は、一人称から二人称を経て三人称（複数）へと辿ってきた歴史がある。人間性心理学をはじめとした一人称への着目は、三人称複数のアプローチによって抜け落ちた個性を拾い上げる試みであり、「二人称の科学」という発想は、それらの折衷による実践のおよび方法論の補完といった実際的意味合いもある。

その意味で、臨床行動分析の立場の論者が、Gendlinを引き、人間性心理学との相似性を打ち出す展開は新鮮であり、また納得がいくものである。とりわけ、ACTの理論的・実践的背景（Hayes, 2002）を考えれば、腑に落ちる。なぜなら、Hayes, S. は、人間性心理学の立場の新しい心理療法としても注目されている感情焦点セラピー（emotion-

focused therapy）の開発者である Greenberg（2002）と旧知の友人であり、ACT 自体、行動分析の理論的拡張という形式をとっているが、実際は Hayes 自身の個人的体験の理論化<sup>1)</sup> だからである。武藤論文の射程は、Hayes の大胆な理論的探究と同様、「二人称の科学」という新たな方法論や、あるいは対人援助学における一つの立場を明確化するものというよりも、従来、対立的に捉えられてきた行動分析学と人間性心理学の橋渡しをし、もっと言えば、学派間の対立を超克する一つ統合的アプローチの可能性を模索するところに真価があるのかもしれない。

### 引用文献

- Baker, M. (2015). Over half of psychology studies fail reproducibility test. *Nature Online*. Retrieved from <http://www.nature.com/news/over-half-of-psychology-studies-fail-reproducibility-test-1.18248> (August 30, 2016.)
- Fransella, F. (1995). *George Kelly*. London: Sage. (フランセラ, F. 菅村 玄二 (監訳) (2017). 認知臨床心理学の父 ジョージ・ケリーを読む——パーソナル・コンストラクト理論への招待—— 北大路書房)
- Foucault, M. (2003). *The birth of the clinic: An archaeology of medical perception* (A. M. Sheridan, Trans.). New York: Routledge. (Original work published 1963)
- Gendlin, E. T. (1997). *Experiencing and the creation of meaning: A philosophical and psychological approach to the subjective*. Evanston, IL: Northwestern University Press. (Original work published 1962)
- Gendlin, E. T., & Johnson, D. H. (2004). Proposal for an international group for a first person science. Retrieved from [http://www.focusing.org/gendlin\\_johnson\\_iscience.html](http://www.focusing.org/gendlin_johnson_iscience.html) (August 30, 2016.)
- Greenberg, L. S. (2002). *Emotion-focused therapy: Coaching clients to work through their feelings*. Washington, DC: American Psychological Association.
- Gunnaugson, O. (2009). Establishing second-person forms of contemplative education: An inquiry into four conceptions of intersubjectivity. *Integral Review*, 5, 25–50.
- Hayes, S. C. (2002). Buddhism and acceptance and commitment therapy. *Cognitive and Behavioral Practice*, 9, 58–66.

1) Personal communication (August, 2009)

- Kelly, G. A. (1955). *The psychology of personal constructs: A theory of personality* (Vols. 1-2). New York: Norton. (ケリー, G. 辻 平治郎(訳) (2016). パーソナル・コンストラクトの心理学 北大路書房)
- Mahoney, M. J. (1974). *Cognition and behavior modification*. Cambridge, MA: Ballinger.
- 武藤 崇 (2017). 対人援助学の方法論としての「二人称」の科学 対人援助学研究, 5, 1-12.
- 野家 啓一 (2004). 「二人称の科学」の可能性 聖路加看護学会誌, 8 (1), 50-51.
- Open Science Collaboration (2015). Estimating the reproducibility of psychological science. *Science*, 349 (6251). Retrieved from <http://science.sciencemag.org/content/349/6251/aac4716> (August 30, 2016.)
- 菅村 玄二 (2007). 単純系から複雑系の心理療法へ 三輪 敬之・鈴木 平 (編) 身体性・コミュニケーション・ところ (pp. 1-75) 早稲田大学複雑系高等学術研究所 (編) 複雑系叢書 第2巻 共立出版.
- 菅村 玄二 (2016). 〈身〉と気づきの関係を考える 〈身〉の医療, 2, 28-39.
- 対人援助学会 (2012). 学会について Retrieved from <http://www.humanservices.jp/about/index.html> (August 29, 2016.)
- Varela, F. J., & Shear, J. (1999). First-person methodologies: What, why, how. *Journal of Consciousness Studies*, 6 (2-3), 1-14.
- Wilber, K. (2015). The meaning of the “2nd-person.” Retrieved from <https://www.integrallife.com/integral-post/meaning-2nd-person?page=0,1> (August 30, 2016.)

(2016. 11. 18 受理)

(ホームページ掲載 2017年3月)